



令和7年度 さいたま市立土呂中学校 学校だより

見沼のほとり

第 9 号
令和8年1月8日

学校教育目標 主体的に生きる人間の育成 《意欲・健康・豊かな心》

新しい年を迎えて

校 長 金子 慎一郎

2026年（令和8年）がスタートしました。本年も宜しくお願いいたします。昨年度は土呂中学校にとって節目となる30周年記念式典が開催され、土呂中学校の歴史について振り返ることができました。30年前のさいたま市は大宮市、浦和市、与野市の3市で行政を進めていました。平成13年5月1日に合併してさいたま市が誕生し、平成15年4月1日には旧大宮市域に西区・北区・大宮区・見沼区を、旧与野市域に中央区を、旧浦和市域に桜区・浦和区・南区・緑区を設置し、全国で13番目の政令指定都市となりました。平成17年4月1日には、岩槻市を編入して岩槻区を設置し、さいたま市も25周年を迎えて現在に至っています。新たな年を迎え、さらに進んでいきたいと思ひます。



さて昨年の「今年の漢字」では「熊」が1位になりました。47都道府県別の第1位を調査すると、北海道・東北地方では「熊」が1位、中国地方・四国地方・九州地方は「米」が1位でした。ちなみに埼玉県は「米」が1位でした。また、大阪府では全国で唯一、「脈」（全体第4位）が第1位に選ばれました。応募理由には、大阪・関西万博に関連するコメントが多く寄せられており、万博開催が大阪府民にとって非常に関心の高い出来事であったことがうかがえます。

では、なぜ「熊」が1位になったのでしょうか。それは熊が人間の生活圏に出没していることが理由とされています。令和6年度の熊による人的被害は82件だったのが、令和7年12月5日時点で209件と約2.5倍に増えているそうです。さらに調べていくと熊の大量出没の背景には三つの要因があるそうです。一つは、クマの個体数そのものが増えていること。二つ目は、餌の不足、そして三つ目が、人間社会の変化です。特に令和7年度は全国的に気温が高く、ドングリなどの木の実が実らない不作年で、秋の餌が不足して代替の食べ物を求めて熊が行動範囲を広げていたそうです。また、地方の人口減少や高齢化により、かつて人が管理していた田畑が耕作放棄地となり、人がいなくなった土地は野生動物が自由に通り抜けられるようになり、結果的に人とクマの距離が近づいてしまうのだそうです。ニュースだけを見ると“危険地帯になった”と感じてしまいがちですが、北海道の知床地域ではヒグマによる死亡事故は少ないそうです。実際に現地で暮らす人たちは、クマと共存する知恵を持っていて、森に入るときは声を出すことや、子どもも音を立てながら歩くことが日常だそうです。そうした“作法”を守って生活しているからこそ、知床地域の中では人身被害がほとんど起きていないのだそうです。まさに自然との共存を実現していると思ひます。

話は変わりますが、「子どもの自立を促す子育て法」として教育活動家の三谷宏治さんが、子どもに責任と権限を持たせ、親は見守る・ガマンすることを述べておられました。例えば「家事をどういう手順でやるかを考え、実行に移すという経験は、勉強のそれと全く同じ」で、お手伝いをする子はコミュニケーションスキルや課題解決スキルが高いという結果が国立青少年教育振興機構の子供の生活力に関する実態調査で示されています。欧米では共働きが多く、家族で家庭のお手伝いを分担しているそうです。内容は食器並べ、食器洗い、廊下の掃除、炊飯、食材の買い出し、洗濯物をたたんでしまう等、どれも滞ってしまうと家族の生活が回っていかない大切な家事です。実際に食器洗いが子どもの役割であったとして、汚れた食器がいつまでも流しにあれば、親は我慢できずに洗ってしまったりします。でも、それではダメだそうです。子どもはすぐにやらなくなってしまいます。お手伝いを通じて様々な力を育むためには、子どもたちに継続して家事を任せ、権限を持たせることが大切で、親が忙しいときだけ声をかけて手伝わせたり、細かくやり方まで指示していたりしては、子どもが自分で工夫する余地がありません。ただの小間使いになってしまいます。重要なのは家事を任せる。やり方に口を出さない。ダメでもガマンするか笑ってあげる。親と子のガマン比で負けないようにすることだそうです。自然界の熊と共存するためには作法を守って実行していくことが大切です。家庭でも共存するためにはその家庭の作法を守って生活していくことが重要だと考えさせられました。